

松山幸生先生講述

全32回--17

2022年12月

写者

小原靖夫

# ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

## 第17回 偉大な大祭司・神の子イエス③

### 終わりの時は既に始まっている

#### 第9章⑳節から㉔節 罪を贖う唯一のいけにえ

- ㉓このように、天にあるものの写しは、  
これらのものによって清められねばならないのですが、  
天にあるもの自体は、これらよりもまさったいけにえによって、  
清められねばなりません。
- ㉔なぜならキリストは、まことのものの写しにすぎない、  
人間の手で造られた聖所にではなく、  
天そのものに入り、今や私たちのために神の御前に現れてくださったからです。
- ㉕また、キリストがそうなされたのは、  
大祭司が年ごとに自分のものでない血を携えて聖所に入るように、  
度々御自身をお献げになるためではありません。
- ㉖もしそうだとすれば、天地創造の時から度々苦しまねばならなかったはずですが。  
ところが実際は、世の終わりにただ一度、  
御自身をいけにえとして献げて罪を取り去るために、現れてくださいました。
- ㉗また、人間にはただ一度死ぬことと、  
その後に裁きを受けることが定まっているように、
- ㉘キリストも、多くの人々の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、  
二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、  
救いをもたらすために現れてくださるのです。
- (第9章㉓節~㉘節)

先ず「主が私たちの罪を負ってくださった、イエスは私たちの罪の贖いのために十字架に架けられた」この事柄がヘブライ人への手紙の中で、とりわけこの箇所「大祭司イエスを考える時に大事な一つのポイントとして掲げられているのではないか」と思うのです。

マルチン・ルターは、「このキリストが私たちの罪を負ってくださったという、この出

来事は、正に新約聖書全体、あるいは福音が依って立つべきところの基盤なのだ」と語り、特にこの部分については、徹底的に理解することが必要なのだと語って、彼の「小教理問答」の中で大変大きく取り上げています。

私たちがそれほど大事な「キリストの贖い」という問題について、心を向けていくことが必要なのですが、色々な機会に教会などでもよく聞く話に、ベネディクトが書いた『菊と刀』という本の中で、「日本人は、罪を償う贖罪ということについては殆ど関心を示さない。恥をすすぐということは一生懸命考えるけれども、罪を贖うとか罪を償うということはあまり問題になっていない。その証拠に、日本で行われる様々な伝統的な行事、あるいは神社で行われる儀式を見ても、自分たちの幸運や豊饒、豊かさを求める儀式はあるけれども、贖罪の儀式は一つもない」と語っています。すごく面白い観点だと思います。

そうであれば、ルターにとって大問題であった贖罪は、日本人にとってはあまり大きな問題ではないのかもしれませんが。ですから、「私たちがこの贖罪の問題を本気になって考えていくことは、ある意味で私たちの日常生活や、社会の中で生きている生きざまの中では大して気にしないで済む問題を、殊更気にして生きてゆかなければならない問題なのだ」と言えると思うのです。（ここに日本ではキリスト教の伝道の難しさがあると思うのです。私は罪など犯していないという人は多いように思われます）

今日の第⑳節以下のところですが、先ずその前の箇所で、

⑱節から㉑節に

「水や緋色の羊毛やヒソプと共に若い雄牛と雄山羊の血を取って、契約の書全体と民全体とに振りかけ」

とあります。

これが神の契約の成立の理由なんだとモーセは語った、と書いてあります。確かにその意味では大事なことが書いてあると思いますし、

㉒節にも

「血を流すことなしには罪の赦しはあり得ない」

と書かれているわけですから、「この聖書が重視している『罪の贖いの問題、あるいは罪の清めの問題』は、私たち日本人にとって、自分たちの状況をしっかり見直しながらか捉えてゆかないと、「はっきりした形では確認されない危険性をもっている」と考えられるのです。

先ずこの㉒節までのことを受けて冒頭㉓節では「このようにこのように、天にあるものの写しは、これらのものによって清められねばならないのですが、

…」と書かれていますから、ここを少し大まかにまとめてみますと、血を流すことによ

って贖いが与えられるのですが、そのために律法によれば様々なもの、ここでは若い雄

牛と雄山羊の血が振りかけられて『何を清めるのか』、血によって一体何が清められるのか』ということを考える必要があります。

なぜ、そんなことをお話するかというと、この㉓節から㉔節のところは原典で読んでみると大変面白いことに『ターム（期間）がはっきりしない、』何時のことを言っているのかわからないのです。

つまり、過去のことか、未来のことか、現在のことを言っているのか、わからない。じゃあどう捉えようかなと考えて見ると、少なくとも神殿が清められるとか、幕屋が清められるとか、聖所が清められるというようなことは㉔節までに使っているわけですが、事実は、この手紙が書かれた一世紀の終わり頃、「神殿は既になかった」のです。紀元七十年に破壊されて、それ以後再建されていないのです。ですから礼拝とか、儀式とか、神殿とか、幕屋とか色々なことを言っているけれども、「現実に祭司の儀式は行われていない」のです。<sup>157</sup>

そうすると、現実的に捉える方法として「あなたがたは神の宮であって」と聖書で言っているから、「神の宮であり、神の幕屋であるあなたがた自身が清められなければ礼拝を献げることも何もできない」ということになる。それはある意味では「贖いという言葉に置き換えられる」ことにもなります。私たちが「清められるとは、贖われることなのでから」その「贖われなければならない存在である『私』を、一体どうやって認識しているか」ということがここでは新しい問題になって来ると思われます。<sup>158</sup>

前置きが長くなりましたが、今日のテキストに入ります。

### 第㉓節、

このように、天にあるものの写しは、これらのものによって清められねばならないのですが、天にあるもの自体は、これらよりもまさったいけにえによって、清められねばなりません。

「天にあるものの写しは」の天はウーラノイス（名詞・諸々の天、天）で天国そのものを示すが、「天にあるもの自体」の天はエプーラニア（形容詞・天的な、天上の）で、天に属している人々を示す。

後者の例としては、

コリントの信徒への手紙Ⅰ 第15章㉔～㉕

㉔ 最初の人土は土ででき、地に属する者であり、第二の人は天に属する者です。

㉕ 土からできた者たちはすべて、土からできたその人に等しく、天に属する者たちはすべて、天に属するその人に等しいのです。

㉖ わたしたちは、土からできたその人の似姿となっているように、天に属するその人の似姿にもなるのです。

「天にあるものの写し」は動物のいけにえを献げる神殿や幕屋のことであり、「天にあるもの自体」はキリストの贖いの血に与ったキリスト者のことであり、今や神の宮であり、神の幕屋なる者であるが賛美と悔い改めのいけにえと社会的奉仕といういけにえを献げて清められる必要があった。「天にあるもの自体は、これらよりもまさったいけにえ（複数形）」であるから、「天にあるもの自体」は天国そのものではないと考えらる。（ギリシャ語新約聖書釈義辞典II参照……以上は森容子先生に加筆をお願いしました）

「私たちとイエスとの関係を考える時にも、罪を全部赦してくださったのだからそれでよいのだという形で物を見てゆくだけではなく、そのようにしていただいた私がそれに相応しく生きているかどうかを問題にしましょう」ということがここに出て来る。

164

つまり著者は、今の時を『永遠に続く今』としては捉えていない。イエスが最初においでくださって贖罪の死を遂げてくださったあの出来事から、もう一度おいでくださり裁きを行われる再臨までの間の『中間の時としての今』を捉えている。しかもその『今』は、再臨の日に向けての備えの『今』なのだ。だから「すべて行動する時には、イエスが贖ってくださったということを感じて生き、その願いに相応しい実を結ぶのだ、再臨の時にゲヘナの火の中に投げ込まれないような生き方をしない限りイエスの血に対して冒瀆をしているのだ」という信仰がこの裏側にきちっと秘められているのです。

今日の箇所の一つの特色は、「時の流れ」を一つのベースにおいてものを見ることです。この時の流れは、「イエスが受肉なさり、贖いを完成して下さってから再臨に至るまでの時」という時間的な一つの広がりであり、この流れの中でイエス・キリストの贖いをどう受け止めているのかということなのです。

もっとこれを広い姿で言えば、天地創造の時からキリストの再臨の時に至るまでの歴史の流れの中で私たちはどうだったのだろうか、今、私たちはどうなんだろう。キリストに贖っていただいたというその一つの時点を越えた「今の生き方はどうなんだろう」ということがここで問題になって来ると思います。

二番目の特色は、「天と地」という形での問題を出すのです。「天」には真実なものがあって、その影・写しとして現在の「地」があるのだ。幕屋にしろ何にしろ、それは天にあるものの写しにしか過ぎない。天にあるものは完全だけれども、写しそのものは完全ではないから絶えず清めなければならないという発想をもっている。そうすると「唯一の変わることがない神の御意志・摂理というものがあって『その摂理の、地上への投影として今日』があるのだ」という捉え方をすることができる。<sup>166</sup>

そういう捉え方は旧約聖書で沢山出て来ています。

例えば、コヘレトの言葉の中には「泣く時があり、笑う時があり、生まれる時があり、死ぬ時がある」という形で「すべてのものに『時』がある」と言っています。それは、神が

既に設定なさっているその「時」が地上に突き刺さっている、地上に投影されて来る、そのことによって「ことが起こるのだ」と言っているわけです。

すべてのことは、神の御意思の中で「時」は定められ、その通りに流れてゆく、それは天に起こっていることが地上で具体化してゆく「時」だという捉え方をしているのです。創造から再臨までという時の流れと方向を「横軸」とすれば、天と地という『縦軸』の中で起こっている出来事の一つ一つが、「その二つの軸が交差している部分で起こっている出来事なのだ」という捉え方をしているわけです。

神の意思によって流れている時と、神の意思によって投影されてくる出来事とを、深い摂理の中にある一つ一つの事柄を起こしているのだという認識をもって捉えようとしているのです。

#### 第⑭節、

なぜならキリストは、まことのものの写しにすぎない、人間の手で造られた聖所にではなく、天そのものに入り、今やわたしたちのために神の御前に現れてくださったからです。

これもある意味では難しい言葉です。<sup>168</sup>

イエスは、本当のものの写しに過ぎない人間の手で造った聖所、ないしは神殿、そんなところにおられるではなく、天そのものにお入りになった、これは「昇天です」。そこで何をされているかという「私たちのために、神の御前に現れてくださっている」、裏返しに言うと、「イエス・キリストによって私たちもまた、神の御目の前に置かれています」と言っているのです。

かつてあなたがたは地上に属する者であったけれどもイエスを信じ贖われた以上、イエスが神の御前にある以上は、あなたがたも共に神の御目に晒されている存在なのです。（僅かな誤魔化しもきかない存在なのだということです。）

この箇所は色々な訳し方ができるところですが、一つは、「正にこの世の、今日そのものが神の御目の前に晒されている時、それは終わりの日なのだ」。あるいは、「もう既に天そのものにイエスがお出でになった以上は、すべてが神に記録されている出来事になっている」。

己が身上とか、己が誇りとか、己が栄えとかはもはや通用しない時代になっている。時の迫りというかイエスが宣教を始められた時の言葉が「時は満ちた、神の国は近づいた、あなたがたは悔い改めて福音を信じなさい」であったが、正にそうだ。もうその時が十分にになっている。神の国はそこまで来ている。だから、この世のものに目を向け、この世の価値で生きることを止めなさい。これはある意味では「神の御前における積極的な生きざまが求められている」と言えると思います。

第⑳節、㉑節、

また、キリストがそうなさったのは、大祭司が年ごとに自分のものでない血を携えて聖所に入るように、度々御自身をお献げになるためではありません。もしそうだとすれば天地創造の時から度々苦しまねばならなかったはずで、ところが実際は、世の終わりにただ一度、御自身をいけにえとして献げて罪を取り去るために、現れてくださいました。

ここもすごく解釈しにくいです。

「終わりの時にただ一度現れてくださいました」ということは著者は「今は、もう終わりの始まりの時だ」と言っているのです。

イエスが『一度だけ』ゴルゴダという至聖所で執り成しをしてくださったのだから、それによって罪責は赦されている。あなたがたは罪赦された自分である以上、罪に凝り固まった自分であることを『今もなお』追い求め続けてはならない。

私はここで大変な問題だなと思いながら読んだ言葉はその前の所にも出て来る「一回限り」という言葉です。この言葉が何回も出て来ます。それは一度しか起こらない、「絶対的な出来事なのだ」という言い方をしているわけです。<sup>170</sup>

しばしば教会で聖餐式を行います時に「キリストはあなたのために血を流し、贖ってくださったことを記念して、キリストの赦しと贖いを信じて、その証しとして私たちに与えられた肉をとり、血をいただきますよ」と言うのですが、その時私の中に、「あの時一度限り行われたことが絶対なのだという信仰が果たしてあるだろうか」との悔い改めが去来します。

ここでは、天地創造この方、人間はさんざん神に背くことをやってきたから何度もイエスは死ななければならなかったかということ、そうではないと言っているのです。そうすると、「私たちはなぜキリストの死を記念するのか」ということになりますが、「キリストの贖いはこんなにも罪に汚れた私をも絶対的な神の救いの中に位置づけ、確約を与えるために十字架に架かってくださった、その恵みの中に私たちは歩んでいるのだということを絶えず再確認しつつ、罪深い者であるにもかかわらず、贖われた喜びを生きることなのです。

しかも、その主は既に戸口まで来ておられる、ということ覚えながらイエスに対して私たちが本当に心の戸を開けて従順に従ってゆく、そういうことが求められていくのではないか」と思います。<sup>170</sup>

「ただ一度だけ」という問題を考えて行くときに幾つかの事柄を確認する必要も出て来ます。

先ず第一に、キリストはいつでもここにいてくださる（インマヌエル）という信仰がある。ところが、いつでも今ここにいてくださるイエスは、ただ一回だけ歴史的な事実として十字架にお架かりになった。しかも「この一回だけですべては完璧に終わっている」ということなのです。

従って、聖餐式を繰り返し行うことは、「その血のしたたりは、この私に振りかけられている」ということを『再確認してゆく』ことなのです。

二番目には、イエスの贖いは、だんだんとか、次第にとかいうものではなく最終的、究極的に与えられた問題なのだ。だからそれは、イエス御自身が『神の愛の完全な執行者』であられた、と同時に、神に献げられた『完全な従順』をもって御自分をお献げになったという『二つの完全』からなる。神の愛を完全に敷衍されると同時に、完全に仕え生き抜くという形においてイエスは罪の贖いを完璧にしてくださった。そういうことをやはり本気になって考えなくてはいけないのだと思います。<sup>171</sup>

キリストの贖いは二つとしてないわけですから、この十字架の贖いを本当に信じる以外に終わりの時に救われる道をもたない。そういう神の愛と憐れみとの中で今日を生きることが不可欠な問題だろうと思うのです。

#### 第⑦節②節、

また、人間にはただ一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定まっているように、キリストも、多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです。

このところまで進んで来ますと、その事柄が今度は違う角度から言われます。罪から私たちが解放されることは「罪が完全に取り除かれると同時に、なおそれでも残っている罪をキリストが全部負ってくださる、罪のない状態を作ってくださるのだ。そのことによって『私たちは二重の清めをいただける』と同時に、私たちの中にある様々な罪が機能しないようにそれを徹底的に御自分が担い切り、御自分のものにして持ち去ってくださるということ」なのです。

「それがあのイエスの十字架にはあるのだ」と言われている。清めることは今ある状態のままで「まあいいやと受け止めてくれること」ではなく、今ある状態の中の相応しくない部分があるのなら「そのすべてを毎度全く新しくする」、そういうことが行なわれなければ清めではないのです。

それには、上からぱらっと血を振りかけただけでは何もならない、キリストの清めはそのようなものではない。手を伸ばしたら、すぐそこに罪があるような状態で清めを行っても何も役に立たないのです。手を伸ばしてもどこにも罪のない状態をイエス・キリストの贖いによって作ってくださったと同時に、それでもなお私たちの中に残されている罪の根があるからその根さえも全部抜き去り滅ぼし去り、御自分が担い切ってください。だから、私たちは罪を冒す可能性もなければ罪を冒す危険性もないのだ、「それが完全な清めなのだ」と語っているのです。

けれども、現実にはそんな完全な清めの状態にはなっていない、私たちの周りには沢山の罪があり私自身も罪を冒す可能性を沢山持っている、今だ罪に誘惑される危険性と罪を犯す可能性をいつも持っているわけですから、そういう状態のままでは清められていないということになるわけです。

そこでこの箇所「人間というのは、悔い改めずに死んだ後は、裁きを受けることになっています」と宣言しているのです。これは日本人の発想とは少し違います。

この国では、仏教の教理においては「死んだら成仏するか、その方向に向かう」のです。ところが聖書の教えは、「死んでからでも、悔い改めない限りは裁かれるのです、滅びるのです」と言っているわけです。教会を中心としたキリスト教社会が自殺に対して非常に「厳しい見方をしているのはそこなのです。」

あることを犯してしまい、死んだらその罪から解放されるということが自殺の動機の一つにあります。

しかし、キリスト・イエスの愛に縋って神の前に徹底的に従順になり御言葉に生きる以外に罪を拭う道はないのだ、イエスが贖ってくださったことを信じ、その御方のお言葉に従い続ける中で清められていく以外ないという発想があるわけですから、「死んでそれでいいということにはならない」のです。

「イエスは十字架において、御自分を献げつくして死なれ、神の言葉に従順であったがために神の許にあげられた。ですから、私たちも神に従い抜いて御言葉に忠実であり続けるならば、死ぬことによって神の御許に引き上げられる。これは旧約聖書の中にもあることです。「エノクは神に従ったために神に引き上げられ見えなくなった」そういう発想をこの著者は非常に大事にするわけです。

神の御前における従順は、死を超えて、神の御前に立てる人間に変えてくださる。イエスの死に対しては、「主はまたおいでになりますよ」と言い表すために次の⑳節ではすごく丁寧に言っています。

第⑳節、

キリストも、多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです。

再臨をどう捉えていくかがここでは一つの大事な問題として提供されています。しかも著者はここまですっと「終わりの時には子によって語られた」、ということを書き進めて来たのですが、『再臨』を非常にはっきりした形で「二度目においでになる時には」という形で書いてあるのは、ここが初めてなのです。

(ここから前のところには「再臨」というものはほとんど出て来ない、「ここから再臨という問題が非常にはっきりした形で示されるのです」)

ところで、⑳節前半の「多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた」とあるのは



「教会の時の始まり」を示しています。そしてその後、今度は「罪を負うためではなく、御自身を待望している人たちに救いをもたらすためにもう一度現れてくださる」時に歴史は完結するのです。

昇天なさった復活のキリストがもう一度おいでくださるその時までを、私たちは今、生きてます。それが私たちの、『今』であり、そしてその『今』は終わりの日に向かって進められている「終末的な『今』なのだ」、というのです。

ですから、終末的な『今』というのは、別に焦ることや緊張することを求められているのではなく、「本気になって再臨のイエスを待望しているのか、神の国の影ではなく、神の国そのものがこの歴史に突き刺ささってくださることを待ち焦がれているのか」が、正に救いにあずかるかどうかを決定することになるだろうと言っているのです。

そのような意味でこの箇所では「罪を贖う唯一のいけにえ」というタイトルで書き出しているのですが「罪を贖ってくださったことを信じる」ということは、「究極的には、神の御支配の中に罪なき者として生きることが許されると確約してくださった」ことになるのです。そして「その御方の確約に応えるために、この御方の現れる日を待ち焦がれながら日々を生きているかが問題なのですよ」というのがこの9章で言われていることです。

その意味では大変大事な問題を僅か六節位の間で語っているわけですから、「ここではっきり打ち出された、『中間の時の思想とか、再臨の思想とか、贖いに関する問題とか、清めの問題とか』をしっかりと捉えておかなければいけないのです。

清められるということは、「罪に私たちが手を伸ばそうとしても守られて触れることがない、そういう状況の中に生きること」です。言い換えれば、「キリストの御支配の中に絶えず生き続ける。それに対して、讃美と感謝とをもって今日を生きるようにされている」と言っても良いと思います。そういうことが、終わりの日に救われるために残されている『ただ一つの神からのプレゼント』なのです。しかも、それは究極的なただ一つであって、それさえあれば他の一切は不必要なんだということです。

まさに、マタイによる福音書によれば「神の国と神の義を求めなさい、そうすればこれら一切のものはこれに添えて与えられる」のであるわけです。「そういう積極的な意味でキリストの贖いを受け止めてゆこうとする生き方がこの9章に書かれていることだ」と思います。(1997年6月14日)

写者あとがき

松山幸生先生のこの「ヘブライ人への手紙に学ぶ」は前書きにもありますように、「学生時代から40年以上も付き合ってきた仲間との学びのために、ある程度の相互理解の上に立って展開された、発題的な意味で毎月続けてきた学び」とありますように、聞き手がある程度限定されていることもあり、又1996年という26年間の時間の経過によって、今の

しかも、初めて学ぶ者にとっては理解が困難である時事問題等については割愛させていただきました。それを補うために森容子先生には大変なご苦勞をおかけしましたが、両先生の強い絆によって、この難解なヘブライ人への手紙が、すっきりとした形でまとまっていると信じております。ここまできますと本当に私の如き素人の手を出せる課題ではなかったとつくづく思っております。しかし、道のりの半分を支えられて歩いてきましたので、最後まで力を尽くしてまいります。